

筒井淳也『仕事と家族』「まえがき」— 要点

「知っている」と思っているだけでは何も見えてこない

(…) 私たちは仕事と家族について (…) すでにたくさんのことを「知っている」。
しかしそれだけに、私たちにとって仕事や家族をより長期的なスパンで、あるいはより広い（国際的な）視野で適切に理解することは難しい。（i ページ）

→ 私たちがすでに「知っている」と思っていることは、かえってそれが妨げとなり、問題を「適切に」理解できなくなってしまう。

→ ある問題を理解しようと思えば、その問題を「長期的なスパンで、より広い（国際的な）視野で」とらえる必要がある。

たとえば「女性の社会進出」「専業主婦」「出生率」「少子高齢化」について考えると・・・

(…) 「女性の社会進出」とは何なのだろうか？ それは「働く女性」が増えてきたというよりも、「家業ではない会社に雇用される女性」が増加してきたことを意味する。（ii～iii ページ）

(…) 日本において最も専業主婦の割合が増えたのは 1970 年代半ばであった。出生率が下がりはじめたのは、この時期以降である。働いている女性の割合と出生率を単純に見比べるだけでは事実は何も見えてこない。（iii ページ）

少子高齢化といえば、すぐに育児休業制度の充実や保育所の待機児童の解消といった方策を思いつく人が多いだろう。もちろんこれらの問題に対処することも重要だ。しかし少子高齢化は、日本社会のより深いレベルでの構造的な特性によってもたらされた「症状」の一つである。症状の背後にある問題について理解するためには、他国との比較が必須の作業となる。（iv ページ）

この本の目指すところは？

本書では、このように時間的・空間的に広い視野から「仕事と家族」のあり方を捉えることを通じて、現在の日本社会が抱える問題によりよい見通しをもつて対処できるよう、必要な知識を提示したい。（v ページ）